

サンフランシスコの日本町

慶応義塾大学環境情報学部 渡辺 靖



「一番寒い冬を過ごしたのは、サンフランシスコでの夏である」

こう述べたのは、かのマーク・トゥエインであるが、年間を通して穏やかな気候に恵まれたこの街の中心ユニオン・スクエアから西に約1.6キロの所にサンフランシスコの日本町 (Japantown) はある。第2次世界大戦前は全米で50を超えた日本町も、今ではサンフランシスコとロサンゼルス、サンノゼの3つを残すのみである。

1906年のサンフランシスコ大地震後に現在の場所に移ってからも、1929年の大恐慌、大戦中の日系人強制収容による立ち退きなど、受難の連続だった。

戦後の復興後は、1968年のジャパンセンターの建設を契機に日本資本が進出し、戦前からの建築物は取り壊され、跡地はまるごとショッピングモールとなり、日本町の様子は一変した。

日本の経済バブルが崩壊した1990年代以降は、日本資本が撤退する代わりに、韓国資本が進出した。今日でも魚喜商店 (スーパー) や勉強堂 (饅頭屋) など、創業以来日系人が経営する店も残っているが、100以上ある店舗の多くは韓国資本の傘下にある。

そして、日本町誕生100周年を迎えた2006年、土地建物の75%を所有する近鉄アメリカはロサンゼルスにある非日系企業へ不動産売却を発表した。地元の日系コミュニティの懸念は深刻で、何とか「日本らしさ」を残そうと関

係者へ働きかけている。

ポップカルチャーに代表されるような、海外の若い世代の心をつかんでいる「クール・ジャパン」をもっと前面に出すべきだという声もあるが、世代などによって「日本らしさ」のイメージも大きく異なるのが、現在の日系コミュニティの実状だ。

2000年米国国勢調査によれば、米国総人口に占める日系人の割合は0.3%である。カリフォルニアにはその約3分の1 (約30万人) が暮らし、北米で最も日系人が多い州となっている。日系人人口はアジア系の中では6番目の7.8%で、一般に増加を続けているアジア系の中で日系人人口のみが減少傾向にある。

カリフォルニアへの日系移民は明治時代から始まった。現在、日系人の3分の2は米国生まれ。世代ごとの年齢平均は概ね2世が70～80歳、3世が30代～60代となっている。特に3世以降は多民族間結婚も多くなっており、日本人の血を引くことを特に意識せず、日本語を話さない人たちも増えている。日本を一度も訪問したことがない若者や「日系」よりも「アジア系」としてのアイデンティティを強めつつある若者も多いとされる。

サンフランシスコの日系人人口は約12,000人。もはや日本町の周辺に固まって住んでいるわけではない。今後の日本町がどのように変貌を遂げてゆくのか興味深い。

表紙写真
について

ハラールフードと市民権取得試験

移民の存在は、オーストラリアの食文化に大きな影響を与えている。前号で紹介したライカート (Little Italy) のような、民族ごとに集う街はもちろんのこと、それ以外の地域でも、中国系、ベトナム系、インド系、トルコ系、レバノン系、メキシコ系といったレストランが数多く存在しており、実に多種多様な料理を堪能することができる。

写真は、シドニー中心部を突き抜ける大通り沿いに位置するレストランの看板である。Malaysia, Singapore, Thai という表記から、これら3つの国の料理を扱っていることがわかる。しかし、この店の特徴はそれだけではない。看板のそれぞれの国名の右上に、英語では通常使われない文字が記されているのがわかるであろうか。これはアラビア語で、ハラールと読む。ハラールとはイスラム教の教えに則って屠殺された動物の肉のことである。つまり、このレストランは、イスラム教徒が宗教上、問題なく口にできる食材を使用していることを示している。

シドニーには、この店のようにハラールフードを提供するレストランが比較的多い。また、私の通う大学には、教職員や学生がハラールフードを持参した際に利用できるよう、冷蔵庫と電子レンジが完備されている。これらの例は、それだけ数多くのイスラム教徒がシドニーで生活しているという事実の反映であるといえるし、またオーストラリア

が標榜する多文化主義が実践されている結果であるともいえるかもしれない。

ところが、昨年9月、この多文化主義を覆すような計画がオーストラリア政府によって発表された。市民権取得試験の導入である。この計画が実行に移されれば、市民権を希望する移民は「英語力」と「(アングロ系文化を中心とした) オーストラリアの価値観に関する知識」が問われる試験に合格しなければならなくなる。英国など、伝統的な移民出身国以外からの移住者が増えつつある現在、「国のアイデンティティを定めたい」、「国内の統一感を高めたい」という思いから、この試験を導入しようとしている政府に対し、反対派の人々は、移民 (特にイスラム教徒) の「脅威」に抗おうとするための策にすぎず、多文化主義とは相容れないと痛烈に批判している。

その後、今年1月にDepartment of Immigration and Multicultural Affairs (移民・多文化関係省) がDepartment of Immigration and Citizenship (移民・市民権省) という名称に変わった。この変更は、オーストラリア政府が多文化主義の看板を文字通り下ろしたことを意味しているようにも思われる。今後、ハラールフードを初めとする多彩な食文化は、このようなマクロレベルの政治の余波を受け、変化してしまおうのであろうか。

星美学園中学高等学校 田嶋 美砂子

●表紙写真——田嶋 美砂子 ●表紙デザイン——キャデック